タイトル	# 伊万里焼と変動の美 ～民藝運動による価値観の変遷～		
所属	南山大学アジア学科　張ゼミ	氏名	石橋三和子

↑ 大川内鍋島窯跡の街並み

＊研究目的：
伊万里市の伝統産業である「伊万里焼」が造られ始めた17世紀当初、庶民にとって親しみあるただの日常品という評価から民藝運動を通して時代の変化によって新たな価値観が生まれた今日、海外だけでなく日本国内でも評価を受けるようになった。これらから「やきもの」ひいては「伊万里焼」の今後の評価や産業はどのように変化していくのかを知る。

＊研究背景：
私の地元である佐賀県伊万里、有田では小・中学校時代に授業内でも「伊万里・有田焼」について学び、地域一帯を挙げて力を入れているように感じていた。しかし、さらに地域活性に役立てる方法があるのではないのかと考えた。

＊意義：
伝統産業が断端と衰退することや認知度が低下している問題について異なった視点から新たな解決策へと導く。また、これらの措置や解決策は他の伝統産業が抱える問題解決にも少なからず共通点を見出せると考える

＊方法：
1.文献を探す（民藝運動や焼き物の歴史、特に伊万里・有田焼についての文献をメインに扱う）
2.造り手さんにインタビュー（造り手さんの観点から見る特徴なども参考にする）

＊民藝運動とは？
1926年（大正15）に柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らによって提唱された生活文化運動。失われていく日本各地の「手仕事」の文化を案じ、近代化＝西欧化といった安易な流れに警鐘を鳴らした。また物質的な豊かさだけでなく、より良い生活とは何かを追求した活動。
当時の工芸界の主流は華美な装飾を施した観賞用の作品であった。そんな中、柳らによって名も無き職人の手から生み出された日常の生活道具は「民藝（民衆的工芸）」と名づけられ、美術品に負けない美しさがあり、また人は生活の中にあると考えられた。このように各地の風土から生まれ、生活に根差した民藝には「健全な美」が宿っており、新しい「美の見方」や「美の価値観」が提示された。

※民藝…民衆的工芸の略語で「一般の民衆が日々の生活に必要とする品」という意味

参考ページ：日本民藝協会

↑　伊万里焼・有田焼